



## 粉挽き水車が現役復帰

# 1kg 170円で製粉やります

岩手県奥州市・米里地区

文=編集部 写真=奥山淳志

カッタ、ゴト、カッタ、ゴト……。水車小屋から米を搗く音が響く。

水路を流れる水が水車に吸い込まれて、水車が回る。水車が回ると小屋の中では歯車が回って、杵が上下する。そして、床に埋め込まれた臼の中では、米が米粉になる。

電気も重油も人力も使わない、ぜんぶ水の力だ。

### 米も麦もキビもソバも製粉

岩手県奥州市、種山高原の麓。米里地区よねざとの中沢集落では、製粉用の動力水車「中沢トコトン水車」が現役で活躍中だ。冬になると依頼をうけて、米・麦・キビ・ソバ・ダイズなどの製粉をする。原料1kgにつき170円で、多いときにはひと冬で15万円分ほどをこなす。経費がかからないので、売り上げはそのまま作業賃だ。

水車の直径は12尺（約3・6m）。この水車1つで、8つの杵と1つの大きな石臼を動かすことができる。

水車を動かす水路の水は、一年中流れている。幅1mちよつと、深さは20cmくらいの舗装されていない水路に、悠々と流れる水。木製の水門を開くと、水は水車に向かうスロープに入り、加速して水車に吸い込まれていく。

130年も前、先達によりこのしくみで水車小屋はつくられた。昭和のはじめには夜通しで稼働させていたほどだったそうだが、精米機や製粉機が登場したり、兼業農家が増えてみんな何となく忙しくなってきたりで、水



(右ページ) 右から菊池信子さん、千田熊治郎さん、熊谷邦子さん、浅倉富治さん。熊治郎さんは2004年88歳のとき、水車小屋の茅葺きの棟梁を務めた

ザーっという音は静かな滝のよう。水の力だけで、大きな水車がクルクル回る

車はだんだん使われなくなった。1970年代になると、水車小屋からは杵の音も、人の声も聞こえなくなっていた。

### 総勢60人で40年ぶりの「やねげ」

使われないまま放置され、すっかり朽ち果ててしまった水車小屋を解体する話が出た。2003年ごろのことだ。

そこに「待った」を掛けたのは、中沢で林業と畜産を営む浅倉富治さん(77歳)。「高齢化で元気がなくなってきたから、こういうのがあったら地域おこしになっかも思ってたな」と。持ち主から無料で借り受けると、集落の仲間8人に声をかけて「中沢トコトン水車保存会」を結成、水車復活へ動き出した。

当時の水車小屋は「天井から空が見える」ような状態。水車本体や屋根、木白などは腐っていて交換が必要だった。ほとんどを地元の大工にお願いしたが、屋根だけは自分たちでやることにした。カヤを遠野市から買ってきて準備が整うと、保存会の仲間で「やねげするぞ」とむら中に言ってみわった。「やねげする」というのは方言で、茅葺屋根の葺き替えをするということだ。

米里では40年ぶりの「やねげ」だった。当時88歳の棟梁をはじめとするベテランから子どもまで、4日間で参加者は60人にもなった。屋根に上がる人、カヤを束ねる人、カヤの長さを揃える人……。ベテランの指示を聞きながら作業を見ながら、一人一人黙々と作業したそうだ。